

二〇一六年度

沖縄大学 一般入試B日程

「国語」

・法経学部 法経学科

・人文学部 国際コミュニケーション学科

福祉文化学科

こども文化学科

沖縄大学 二〇一六年度 一般入試 (B日程)

国語

※答はすべて解答用紙に書きなさい。

【問題】 つぎの文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

これは、別のところで何度か①ふれたことであるが、(1)沖縄戦の記憶といっても私の場合は、口にするほどの苛酷な体験があるわけではない。数え年でいえば一歳から一二歳、国民学校の四年生から五年生にかけてのその頃、私の住んでいた宮古の平良町では、沖縄島での激戦を他所に比較的のんびりした日々を送っていたという記憶がある。

【A】 アメリカ空軍による空襲によって②市街地の大半が焼失したり、③ゆそう手段を失って途絶したために食糧難に④陥ってひもじい思いをしたこと、マリアの流行で少なからぬ犠牲者が出たことなど、戦争による被害が無かったわけではない。しかし、沖縄島周辺離島や中南部、山原や島尻で多くの人が味わったような⑤ひさんを実際に体験することはなかった。

私自身の記憶をいえば、ある日、避難先から空襲をうけて真っ赤に夕空を染めて燃え上がる町の様子を⑥呆然と眺めたこと、空襲が終わって兄と二人で避難先から帰宅する途中一機のグラマン戦闘機からいきなり機銃掃射をあびて肝を潰したことからだが、戦争の記憶らしいものとして残っている。

食事にしても、戦争が激化する前後で中身はそれほど違ったものではなかった。宮古のような貧しい島では戦前から甘藷を主食とし、島で取れる魚や野菜で毎日を送っていて、豚肉などは元日などの「ハレの日」に僅かに口にするだけだったから、戦争で孤絶しても食事の内容が大きく変化することはなかった。さすがに量の上では以前に較べてかなり少なくなり、たえず腹を⑦空かせていた記憶は残っている。

食糧といえば近所に宮古上布の工場があつて陸軍の糧秣が保管されてあつた。夜半そこに朝鮮人軍属が忍び込んで玄米を生のまま口におなかを壊したり、忍び込んだところを見つかつて酷く殴られる様子を眼にすることもあつた。工場の周辺には、消化できないまま排出された玄米を含んだ糞が、幾箇所にも垂れ流されていた。今思うとその背後には食事だけではなく差別問題など朝鮮人をめぐる深刻なドラマが展開されていたに違いないが、それらは全く理解の外にあつた。

戦争の激化して後の記憶よりも、私にとって強く残っているのはそれ以前の「小国民」として⑧鍛えられた時期の記憶である。当時は国民学校三年生になると「大日本愛国少年団」の一員としてさまざまな訓練を受けた。暑い日差しの校庭で分列行進を繰り返させられたり、手旗信号やモールス信号を暗記させられたりしたものである。毎月八日は、「大東亜戦争」の開戦を記念する「大詔奉戴日」と称して早朝の暗がりのなか、神社の清掃に駆り出されることもあつた。その他、竹槍の訓練や空襲から身を守るための防空壕への退避訓練などさまざまな訓練を受けたのだが、少年にとってそれらはどちらかといえば、単調で退屈な日常を打ち破るアクセントのようなものであつた。同世代の中に、当時を振り返って自らを「愛国少年」だつたと自省する人もいるが、時代の動きに⑨どんかん私のような少年にとって、それらがどういう意味をもつのかは全く理解できないばかりか考えることさえ

ない「遊び」の延長でしかなかったような気がする。

【 B 】今考えると、むしろそれだからこそその影響は大きかったと思う。(2)意味のわからぬままに肉体化される事によって、その後の生き方が無意識のうちに規制されることが多いに違いないからである。

戦後六〇年を過ぎた今頃でも、無意識に口ずさむ歌が「軍歌」であることに気がついてうろたえることがある。(ああ あの顔である声で 手柄頼むと妻や子が ちぎれるほどに振った旗…)とか、(若い血潮は予科練の 七つ釘は桜に錨…)、あるいは(ラバウル航空隊)、(貴様と俺とは同期の桜…)などどうやって覚えたのか次々と出てくるのである。【 C 】うろ覚えの個所があったり、途中であとが続かなかったりするものも多いが、それにしても十数曲もの軍歌が記憶に残っているのは我ながら⑩おどろく。しかもこれらの歌の多くは「教育勅語」のように強制されて覚えたものではなく、日常の平凡なあれこれの出来事と共に自然に肉体化されたものなのである。【 D 】現在の小学生や中学生が *kioro* の『未来へ』や *BEGIN* の『島人ぬ宝』を受け容れるように、当時の少年だった私(たち)もそれを受け容れたに相違ないのだ。⑪破綻へ導くものは狼の仮面を被って現れるよりも、つづらな⑫Uとみの愛くるしいチワワのように身近に寄り添ってくるのかもしれない。

もう一つ、戦争の記憶よりも身に沁みる痛みを伴って記憶するものに、戦後復員した兄が戦争中に罹患した結核で数年も経たずに死亡したことがある。中国大陸を転戦した兄は敗戦によって生き延びて帰郷したものの、その身体は酷く痛めつけられていた。戦後の混乱の中にあつて碌な食べ物もなく、特効薬も手に入らなかったから日に日に衰え苦しんでいるのを見守るだけであつた。その頃の記憶として⑬せんめいに残っているのに、毎朝薄暗い中を、兄に栄養をつけるために屠殺場から豚の生血を購って、それが固まらないように走って持ち帰り、飲ませるといふことがあつた。そのように病に⑭効くとなれば何でも試みたがしかし全ては空しかった。

今でもやせ衰えた身を横たえて、大きな眼でじつと表を見つめていた兄の様子を思い起こすことがあるが、そんなとき「戦争」を「戦闘状態」と捉えることの無意味であること、むしろその後によくの悲劇があつたことを思い起こす。そして(3)戦争とは何時から何時までをさすのか、戦争の犠牲者とはどの範囲でいうべきなのか、改めて考えさせられるのである。

(岡本恵徳「偶感(四二)」「沖繩」に生きる思想』未來社、二〇〇七年)

注1 マラリアハマダラカの媒介するマラリア原虫によって起こる伝染病。周期的な高熱発作を起す。戦時中、石垣島、波照間島では軍命により強制疎開させられた住民の間で大流行し、多くの犠牲者を出した。

注2 糧秣ハ軍隊で、兵と馬との糧食。兵糧とまぐさ。

問一 傍線部①から⑭の漢字にはひらがなで読みをつけ、ひらがなは漢字に直しなさい。

問二 【 A 】から【 D 】にあてはまるものを次のなかから選んで入れなさい。
【 もっとも もちろん おそらく しかし 】

問三 本文中に(1) 沖繩戦の記憶といっても私の場合は、口にするほどの苛酷な体験があるわけではない。とあるが、著者が体験したことに該当するものには○を、該当しないものには×を、それぞれつけなさい。

- ① () マラリアの流行で家族を失った。
- ② () グラマン戦闘機に機銃掃射をあびて大けがをした。
- ③ () 食糧難で玄米を生のまま口にしておなかを壊した。
- ④ () 手旗信号やモールス信号を暗記させられた。
- ⑤ () 「教育勅語」を覚えさせられた。
- ⑥ () 中国戦線から帰還した兄が戦後になって病死した。

問四 (2) 意味のわからぬままに肉体化される事とはどういうことか。その問題点を含めて二〇〇字程度で説明しなさい。

問五 (3) 戦争とは何時から何時までをさすのか、戦争の犠牲者とはどの範囲でいふべきなのか、改めて考えさせられるのである。とあるが、それはなぜか、八〇字程度で説明しなさい。

問六 この文章についてのあなたの意見や感想を二〇〇字程度で書きなさい。